

中高生の部 課題 「走れメロス その2」 太宰治

ナレ③ …… 路行く人を押しつけ、跳ね飛ばし、メロスは黒い風のように走った。

野原で酒宴の、その宴席のまっただ中を駆け抜け、酒宴の人たちを仰天させ、犬を蹴飛ばし、小川を飛び越え、少しずつ沈んでゆく太陽の、十倍も早く走った。

一団の旅人と颯さっとすれちがった瞬間、不吉な会話を小耳にはさんだ。

「いまごろは、あの男も、磔はらわにかかっているよ。」

ああ、その男、その男のために私は、いまこんなに走っているのだ。

その男を死なせてはならない。急げ、メロス。おくれてはならぬ。

愛と誠の力を、いまこそ知らせてやるがよい。

風態なんかは、どうでもいい。

メロスは、いまは、ほとんど全裸体であった。

呼吸も出来ず、二度、三度、口から血が噴き出た。

見える。はるか向うに小さく、シラクスの市の塔楼towntowerが見える。

塔楼towntowerは、夕陽を受けてきらきら光っている。

フィロ …… 「ああ、メロス様。」

ナレ③ …… うめくような声が、風と共に聞えた。

メロス② …… 「誰だ。」

ナレ③ …… メロスは走りながら尋ねた。

フィロ …… 「フィロストラトスでございます。」

貴方のお友達セリヌンティウス様の弟子でございます。」

ナレ③ ……その若い石工も、メロスの後について走りながら叫んだ。

フィロ ……「もう、駄目でございます。まだいけません。
走るの、やめて下さい。」

「もう、あの方をお助けになることは出来ません。」

メロス② ……「いや、まだ陽は沈まぬ。」

フィロ ……「ちょうど今、あの方が死刑になるところです。」

「ああ、あなたは遅かった。おつらみ申します。」

「ほんの少し、もうちょっとでも、早かったならー！」

メロス② ……「いや、まだ陽は沈まぬ。」

ナレ④ ……メロスは胸の張り裂ける思いで、赤く大きい夕陽ばかりを見つめていた。
走るより他は無い。

フィロ ……「やめて下さい。走るの、やめて下さい。」

「いまはご自分のお命が大事です。」

「あの方は、あなたを信じて居りました。」

「刑場に引き出されても、平気でいました。」

「王様が、さんざんあの方をからかっても、メロスは来ます、
とだけ答え、強い信念を持ちつつつけている様子でございます。」

メロス② ……「それだから、走るのが、信じているから走るのが。」

「間に合う、間に合わないは問題でないのだ。人の命も問題でないのだ。
私は、なんだか、もっと恐ろしく大きいものの為に走っているのだ。
ついて来い！ フィロストラトス。」

フィロ …「ああ、あなたは気が狂ったか。それでは、うんと走るがいい。

ひょっとしたら、間に合わぬものでもない。走るがいい。」

ナレ④ …言うにや及ぶ。まだ陽は沈まぬ。

最後の死力を尽して、メロスは走った。

メロスの頭は、からっぽだ。何一つ考えていない。

ただ、わけのわからぬ大きな力にひきずられて走った。

陽は、ゆらゆら地平線に没し、まさに最後の一片の残光も、消えようとした時、

メロスは疾風の如く刑場に入場した。間に合った。

メロス② …「待て。その人を殺してはならぬ。メロスが帰って来た。

約束のとおり、いま、帰って来た。」

ナレ④ …と大声で刑場の群衆にむかって叫んだつもりであったが、喉がつかれて噎れた

声こゑが幽かすかに出たばかり、群衆は、ひとりとして彼の到着に気がつかない。

すでに磔はりつけの柱が高々と立てられ、縄を打たれたセリヌンティウスは、徐々に釣り上げられてゆく。

メロスはそれを目撃して最後の勇、先刻、濁流を泳いだように群衆を掻きわけ、掻きわけ、

メロス② …「私だ、刑吏！ 殺されるのは、私だ。メロスだ。

彼を人質にした私は、」

ナレ④ …と、かすれた声で精一ぱい叫びながら、しつこく磔台はりつけだいに昇り、釣

り上げられてゆく友の両足に、齧りついた。

ナレ⑤ … 群衆は、どよめいた。あっぱれ。ゆるせ、と口々にわめいた。

セリヌンティウスの縄は、ほどかれたのである。

メロス② … 「セリヌンティウス。」

ナレ⑤ … メロスは眼に涙を浮べて言った。

メロス② … 「私を殴れ。ちから一ぱいに頬を殴れ。」

私は、途中で一度、悪い夢を見た。

君が若し私を殴ってくれなかったら、私は君と抱擁する資格さえ無いのだ。殴れ。」

ナレ⑤ … セリヌンティウスは、すべてを察した様子で首肯き、刑場一ぱいに鳴り響くほど音高くメロスの右頬を殴った。

殴ってから優しく微笑み、

セリヌ … 「メロス、私を殴れ。同じくらい音高く私の頬を殴れ。」

私はこの三日の間、たった一度だけ、ちらと君を疑った。

生れて、はじめて君を疑った。君が私を殴ってくれなければ、私は君と抱擁できない。」

ナレ⑤ … メロスは腕に唸りをつけてセリヌンティウスの頬を殴った。

メロス②・セリヌ … 「ありがとう、友よ。」

ナレ⑤ … 二人同時に言い、ひしと抱き合い、それから嬉し泣きにおいおい声を放って泣いた。

群衆の中からも、歎歎の音が聞えた。

暴君ディオニスは、群衆の背後から二人の様を、まじまじと見つめて

いたが、やがて静かに二人に近づき、顔をあからめて、「こう言った。

王 ……「おまえらの望みは叶ったぞ。おまえらは、わしの心に勝ったのだ。

信実とは、決して空虚な妄想ではなかった。

どうか、わしをも仲間に入れてくれまいか。

どうか、わしの願いを聞き入れて、おまえらの仲間の一人にしてほしい。」

ナレ⑤ ……どっと群衆の間に、歓声が上がった。

「万歳、万歳万歳。」

ひとりの少女が、緋のマントをメロスに捧げた。

メロスは、まごついた。佳き友は、気をきかせて教えてやった。

セリヌ ……「メロス、君は、まっばだかじゃないか。

早くそのマントを着るがいい。

この可愛い娘さんは、メロスの裸体を、皆に見られるのが、たまらなく口惜しいのだ。」

ナレ⑤ ……勇者は、ひどく赤面した。

配役

ナレーション③	・
ナレーション④	・
ナレーション⑤	・
メロス②	・
フィロストラトス	・
	・
	・
	H
	G
	F
	E
	D

※選考の結果、配役を決定します。

セリヌンティウス／王
・
・
・
渡部陽一